

B-1-3) 難治性てんかんの外科的治療

大西 寛明 (浅ノ川総合病院 脳神経外科)
 江守 巧 (浅ノ川総合病院 神経内科)
 Thoru Yamada Mark Ross (アイオワ大学 精神内科)
 山下 純宏 (金沢大学脳神経外科)

近年, video EEG monitor, MRI, PET などの発達により, 難治性てんかんの手術が米国を中心に広く行われるようになった。今回, アイオワ大学において手術したてんかん患者について, その適応, 術前の評価ならびに成績について報告する。症例の内訳は temporal lobe epilepsy 64例, extra-temporal lobe epilepsy 7例, その他1例の計72例であった。1例に corpus callosum section を行った以外は焦点切除術を施行した。9例に合併症を認めたが, 重篤な後遺症を認めたものは1例のみであった。Temporal lobe epilepsy は80%以上良好な結果を得たが, extra-temporal lobe epilepsy は有効率は50%程度にとどまり, 今後の課題と思われる。

B-1-4) 癌性疼痛に対する Bolus Intrathecal Morphine Injection の試み

加藤 正哉 (公立佐沼総合病院 脳神経外科)
 石井 洋 (公立佐沼総合病院 外科)
 大槻 泰介・吉本 高志 (東北大学脳神経外科)

癌性疼痛に対する除痛法としては, epidural block が広く用いられているが今回我々は, LP shunt tube と Ommaya reservoir を用いた Low dose morphine solution の髄腔内投与を行ない, 良好な除痛効果を得たので報告する。症例は, pancreas cancer 2例, rectum cancer 1例, colon cancer 1例の4例で, それぞれ傍臍部, 側腹部, 鼠径部の頑痛を訴えており, 病恹期間は平均5.5ヶ月。種々の治療にもかかわらず, 術前の visual analog scale (VAS) は6.2~8.0であったが, 術後 morphine 0.25~0.5 mg を2~3回/日注入することにより VAS で, 3.0~5.5までにコントロールされた。注入後, 4例中3例において, 食事, 入浴などの日常生活動作に改善が見られ, 本法は簡便ながらも末期癌患者の疼痛管理に有効な方法と思われた。

B-2-1) 術前診断が困難であった下垂体腫瘍の1例

小鹿山博之・後藤 恒夫 (脳神経疾患研究 所附属南東北病院)
 三浦 俊一・佐々木順孝 (脳神経外科)
 笹沼 仁一・渡辺 一夫

下垂体腫瘍の希な1例を経験したので, そのCT, MRI 所見を中心に若干の文献的考察を加え報告する。症例は59歳女性。副鼻腔炎の既往はない。平成2年12月8日, 多飲多尿を主訴に当科に入院した。入院時, 倦怠感, 頭痛, 発熱などの異常はなく全身状態は良好であった。血液検査で白血球増多はなく炎症反応も陰性であった。視力視野を含め神経学的に異常を認めなかった。下垂体前葉機能は正常であったが, 低張尿が1日5,000 ml に達し, ADH は正常の1/2以下に低下していた。トルコ鞍の断層撮影では軽度の ballooning が見られ, CT では鞍内に iso からやや low density の mass を認めた。MRI では T1WI で iso から low intensity, T2WI で iso から high intensity の mass が鞍内の大部分を占め, 前葉は前方に圧排され, 後葉は識別出来なかった。鞍内型の頭蓋咽頭腫, または Rathke 嚢胞による尿崩症の可能性が高いと考え, 3月3日経蝶形骨洞到達法により手術を行ったところ, 案に相違して鞍内の病変は腫瘍であることが判明した。術後, 副腎皮質ホルモンと抗利尿ホルモンの補償を必要としたが, 髄膜炎などの合併はなく経過良好である。

B-2-2) クリプトコッカス髄膜脳炎1治療例

郭 隆璘・熊野 宏一 (金沢医科大学 脳神経外科)
 竹内 文彦・横山 雅人
 角家 暁

クリプトコッカス髄膜脳炎の1治療例を報告する。症例は26歳, 女性。米屋に勤務し, 飛来する鳩によく餌をやっていた。1984年1月, 感冒様症状で発症し, 頭痛が増強したため近位を受診し, CT で左前頭葉白質部に等吸収域を示し増強効果を示す小腫瘤を指摘された。その後, 意識障害と髄膜刺激症状が出現してきたため当科に紹介された。入院時, 脳脊髄液の墨汁染色によりクリプトコッカスが証明され, 抗真菌剤を投与した。しかし, 60日目頃より両側の大脳皮質下, 基底核, 小脳に造影CTで斑状に増強される病変が出現し, 意識障害が増強し, 左片麻痺も出現した。130日目頃より意識は清明となり, CT 上も病変は減少した。250日目のCTでは左尾状核, 右基底核に増強効果を示す病変を認めるのみとなり, 神経脱落症状もなく独歩退院した。退院後2

年の CT, MRI では退院時の所見とほぼ同様な所見を示した。その後、2児を出産し、健康に過ごしている。

B-2-3) VP シャントが著効した結核性髄膜炎と思われる1例

中里 真二・川崎 昭一 (佐渡総合病院
脳神経外科)

結核性髄膜炎は、早期診断が困難で治療開始が遅れるために予後不良な疾患の1つである。今回我々は水頭症を合併し、VP シャントが著効した結核性髄膜炎と思われる1例を経験したので若干の文献的考察を加えて報告する。症例は63歳女性。昭和63年1月上旬から食欲不振、嘔気、頭痛が出現し、1月29日当院神内受診。意識清明、軽度項部硬直あり。髄液：細胞数 867/mm³ (単球60%)、糖 49 mg/dl、蛋白 325 mg/dl。化膿性ないしウイルス性髄膜炎を疑い、抗生剤投与するも軽快せず、40度の高熱が持続。2月上旬より意識障害が出現・進行し、頭部 CT で水頭症を認め、同日当科転科し、脳室ドレナージを施行した。また結核性髄膜炎も疑い、抗結核剤の投与を行った。2月17日 VP シャント施行。意識障害、発熱ともに徐々に改善し約3ヶ月後軽度精神障害を残して退院。なお髄液の抗酸菌染色・結核菌培養とも陰性であったが、adenosine deaminase (ADA) 活性は 28 IU/l と高値であった。

B-2-4) MRI が診断に有用であった脳幹脳炎の1例

佐藤 光夫・佐藤 直樹 (太田西ノ内病院
脳神経外科)
齋藤 利重・山口 克彦 (太田熱海病院
神経内科)
田中 久恵・山根 清美 (太田熱海病院
神経内科)

症例は15歳の男性で平成2年11月末に感冒症状出現。12月初旬歩行時ふらつき感、複視が出現し近医に入院した。入院時意識清明で左 V₂、両側 VI、左 VII 障害及び小脳失調がみられた。髄液所見で細胞数 29/3 (リンパ球主体) と軽度増加を認めたが、各種ウイルス抗体価の上昇は認められなかった。脳波、単純及び造影 CT、脳血管写でも異常を認めなかったが、MRI で橋から延髄にかけて T₁、T₂ 延長域と橋の軽度腫大がみられ、一部 Gd にて増強部位を認め、脳幹 glioma の疑いで当科入院となった。解熱傾向と左 V₂ 障害を残し脳神経症状の改善がみられたため再度 MRI を施行したところ、脳幹部の T₂ 延長域は縮小し、Gd による増強効果も認めら

れなくなった。脳神経症状と MRI の経時的所見より脳幹脳炎と診断した。脳幹脳炎は比較的稀な疾患であり、画像診断についての報告は少ない。MRI は脳幹部病変の鑑別診断、治療の評価に有用と思われ、若干の文献的考察を加えて報告する。

B-2-5) 放線菌による硬膜下肉芽腫の1例

辻 哲朗・廣瀬 敏士 (公立小浜病院
脳神経外科)
黒田 岳雄 (公立小浜病院
内科)
久保田紀彦・林 實 (福井医科大学
脳神経外科)

症例は76才女性、平成元年9月転倒し、頭皮を切って受診し、頭部 CT は両側硬膜下水腫貯留を認めたが、外来にて経過観察していた。平成3年3月意欲低下、言葉が話しにくくなり受診した。頭部 CT にて硬膜下水腫は iso density 化して増大しており、また左穿通枝領域に low density area を認めた。慢性硬膜下血腫を疑い穿頭洗浄しようとしたところ、硬膜下腔は結合織が充満していた。術後造影 CT 施行したところ硬膜下腔は著明に造影された。MRI では T₁ 強調画像で硬膜下腔の mass は iso intensity を呈し、一部に low intensity area が混在していた。T₂ 強調画像では、mass は iso intensity で、high intensity area が混在していた。T₁、T₂ 共に mass の内側には CSF intensity を認めた。造影 MRI では mass は著明に増強された。組織学的検索では、放射状の菌塊が存在し放線菌による肉芽腫と診断された。術後、内科転科し全身的検索を進めている。本症について文献的考察を加えて報告する。

B-3-1) 白血病に慢性硬膜下血腫を合併した2例

白崎 直樹・河野 寛一 (福井医科大学
脳神経外科)
久保田紀彦・北井 隆平 (福井医科大学
脳神経外科)
林 實 (福井医科大学
第一内科)
綿谷須賀子・今村 信 (福井医科大学
第一内科)

白血病患者では、血小板異常や DIC によって中枢神経系に出血性病変を合併することが多い。慢性骨髄単球性白血病 (CMML) に合併した2例の慢性硬膜下血腫を経験したので、臨床経過について報告しその特徴について若干の考察を加える。症例1は72歳女性。約1年前より CMML にて化学療法を繰り返していた。自転車で転倒した既往があり、頭痛と歩行障害を訴え CT に